

桜蔭俳話会 十一月句会 (第三五〇回)

平成二十八年十一月二十日(日)

会場・旭区民文化センター(サンハート)

2点①死の覚悟つけぬままなり返り花
眞壽

2点①断崖は「地獄のぞき」や石露の花
友子

2点①木の実落つざくりざくりと老いを
生く

直子

2点①茶一本買ふ少年の咳払ひ

幸

2点 真白なる盲導犬や冬の駅
かおる

2点 綿虫や命軽しと教へしか
守

2点 病棟の治験はじまる小春かな
明美

2点 一人居の一人笑ひの帰り花
ツル子

2点 人見知りの子の来る日なり布団干
す友子

1点①寒夜ふと一人欠けたる後のこと
守

1点①はらからの多かりし父母みかん熟
る 朋子

1点 張りつめし寒気切り裂く居合かな
守

1点 仕切りなき田舎の庭のみだれ菊
幸

1点 よく眠る夫や勤労感謝の日
守

1点 風あれば音なし暮れて落葉みち
ツル子

1点 冬の港保護貿易の船荷積む
明美

1点 咲いて散る山茶花わが町坂多き
朋子

1点 金色の海は束の間冬日落つ
友子

1点 黄落のゆふぐれ日比谷松本楼
朋子

ヒスパニックあふれし冬の五番街 明美

1点 崖昏し音なく育つ氷柱かな
守

※ 三分の通過待ち北風通過
かおる

秋深し変化求むやトランプ氏
直子

単線の行く手日当たる枯野かな
友子

旅に出で重なる紅葉晴れにけり
ツル子

筋肉痛はじまる肩や冬に入る
明美

一茶忌の雨垂れに覚め六十五
朋子

黄落やこぼれる光背に受けて
眞壽

迷ふなり鎌倉散歩秋の雨
直子

熟睡児の掌より転がる木の実か
な 幸

黄落の山道踏むや朴槿恵か
直子

七五三我が娘飾れる写真館
眞壽

冬日入るミニシクラメンすつく立
つ

赴任地へ越冬食や肉饅頭
かおる

幸

寄せ鍋や集いし子らに刻更けて

ツル子

柿食ふや野菜不足に秋の雨

直子

あばら屋に柿の実だけが色付ける

眞壽

白菜のひと葉残さぬ調理かな

かおる

十年のカフェに錠や冬ざるる

明美

婦人会会議雑談おでん鍋

かおる

着脹れて風に逆らふ落葉搔

眞壽

おでん酒のれんに映る笑ひ声

ツル子

洞窟の川の連れ来る落葉かな

友子

どしやぶりのスーパームーンさざ

んくわ

朋子

(不在投句 古野明美、稲葉幸、荒木ツル子)

【お詫びと訂正】

十月句会一覧の中で、一文字がぬけておりました。正しくは、次のとおりです。
秋の風ひらひらひと葉落ちもせず
かおる

【兼題について】

十二月句会より 兼題の一句を持参していただくことになりました。(合計五句)

十二月は 「息白し」です。

【事務局からお知らせ】

○十二月句会

十二月十八日(日)午後一時から、旭区
民文化センター(サンハート)

○一月句会。

一月二十九日(日)に変更になりました。